

# アダム・スミス

## —— 道徳感情の生成 ——

高 田 熱 美\*

### はじめに

アダム・スミスが、古典経済学の開祖と称され、同時にグラスゴウ大学の道徳哲学の教授であったことは周知のとおりである。スミスは、『道徳感情論』なるものを上梓したが、これは、道徳の基礎が、理性ではなく感情にあるとするものであった。

元来、道徳の根本に感情をすえる思想は、西欧では本流ではなかった。感情は、激情、私情、主観を越ええないものであって、プラトンにおいては、感情は理性の敵であるとさえ目されたのであった。

これに対して、スミスは、親友であったヒュームと並んで、道徳の基礎に感情を見出したのであった。スミスが語ることは正鵠を射ている。これは、生物学ないし動物行動学の観点においても、いうことができる。

ちなみに、生物の進化の過程を見れば、まず、触覚的反応があり、次に、味、臭、聴、視の感覚が現れ、それに生命の組織・機能が複雑、多様になり、餌や仲間に対する感知・反応が進んだであろう。もちろん、これは、代謝と増殖に必須なことであった。

---

\* 福岡大学人文学部教授

この段階にいたると、餌や仲間の感知のみならず、敵を感知し、回避する反応が生まれたであろう。これは、身体の硬直、威嚇、防衛、攻撃、抵抗などに分化したであろう。これらの身体的反応から、原的感情、すなわち快、不快が生まれ、やがて、それらは喜び、恐怖、怒り、などに派生したであろう。

身体的反応から、感情が分化するとともに、知力が現れる。知力は、餌や仲間を探知したり、敵を認知したりする感覚に由来したであろう。それゆえ、生物の進化の過程で、身体感覚から、感情と知性の分化は同時進行的に現れたといえる。これは、大脳の進化からも明らかである。すなわち、まず、原始的脳が現れ、それが分化・拡大して、感情と認知が働くようになるのである。

感情と知性は、集団のなかで複雑・多様な働きをするようになる。ヒトと900万年前に分岐したチンパンジーにおいても、感情は多様な働きをしている。チンパンジーには、自分がやった食べ物を、相手がうれしそうに食べるのを見て喜ぶところがある。喧嘩に負けて、しょげかえっている仲間を慰めることもある。食べ物を独占する者に怒りを表すこともある。これらの感情はヒトにも受け継がれている。

ヒトは、音声を自由に出すことができるためか、うたを歌い、ことばを語る。うたは感情の表出であるが、ことばは、それだけではなく、認知的活動である。それゆえ、ことばは、ヒトとの関わりにおいて、感情のみならず認知・理解したことを表す。ちなみに、「悲しみ」や「思いやり」は感情のことばであるが、「大きい」や「小さい」は認知のことばである。共同体の生成においては、認知よりも感情のことばが根源にあったはずである。チンパンジーであれヒトであれ、独りで育ち、生きることなどかなわぬ存在であってみれば、まず、共に生きることが可能にする感情がなければならなかったのである。

アダム・スミスに、生物学や動物学の知見が豊富にあったわけではない。だが、スミスは、現実社会の経験から、感情が人間性の原理であり、これが人間の共同体を可能にすることを読み取っていたのである。けだし、スミスの『道

『徳感情論』の全表題は、『道徳感情論すなわち人びとがまず隣人の、そして次に自分自身の行為と性格について自然に判断を下す諸原理の分析を目的とする試論』であったのである。

かくして、本稿は、スミスの道徳感情が、現実の社会のなかでどのようにして生成し、それは、いかなる働きをするかを明らかにするものである。

## 1 共同感情

スミスは語る。「人間はどれほど利己的であると考えられても、その性質（nature）の中には、他人の運命に気を配り、他人の幸福を見ることが楽しいという以外に何ら得ることがない場合にも、その人たちの幸福が自分に欠かせないものとする何らかの原理が明らかに存在する。やさしさ（pity）あるいは同憂（compassion）はこの種の原理のものであり、それは、われわれが他人の不幸を見たり、あるいは他人の不幸をきわめて生き生きしたやりかたで話されたりすると、その不幸に対して感じる情緒である。他人の悲しみから、われわれが悲しみをよく得るのは、きわめて明白な事実であって、なんら例証する必要がない。なぜなら、この感情（sentiment）は、人間性のあらゆる他の根源的な感情（all the other passion of human nature）と同じように、徳の高い人や情け深い人は、それを最も鋭い感受性をもって感ずるであろうが、かならずこれらの人たちだけがもつとは限らない。極悪人や社会の法を破ったとても非道な者も、この感情をもたないわけではない。<sup>1)</sup>」

スミスにおいて、このような感情は、人間性の根源的事実、いわば第一原理であった。それゆえ、この感情は特定的能力ではない。この感情は、他者を気づかい、他者に結びつこうとするア・プリオリな原理であって、人がいるところでは、いつも生きているものである。これは、「他人の不幸に対する共同感情（fellow feeling）<sup>2)</sup>」、あるいは「他人の悲しみに関するわれわれの共同感情<sup>3)</sup>」として現れる。もちろん、共同感情は他人の幸せに対しても現れる。他

人の悲しみを悲しみ、喜びを喜びとするのは、人間性の原理であるからである。

さらに、スミスは、「共同感情」を「共感 (sympathy)」ともいう。すなわち、「共感という言葉は、その最も固有かつ本来的な意味では、他人の苦難に対するわれわれの共同感情を表している。<sup>4)</sup>」という。的確に言えば、共感とは共同感情の現れというべきものである。それゆえ、共感は、現実的、力動的であった。つまり、たんに他者の悲しみや喜びを自分のものとして感受するにとどまらず、自ら他者の悲しみを減らし、喜びを増やす働きをすることによって、他者のなかに生まれた安らぎに共感するものであったのである。スミスは語る。「自然が、人間を社会に適するように形成したとき、自然は、人間に自分の仲間を喜ばせたいという根源的力動および自分の仲間を怒らせることを嫌うという根源的感情を与えたのである。<sup>5)</sup>」力動といえ、感情といえ、両者は根源的という意味で同義であって、これは共同感情に収斂するのである。したがって、共感とは、たちどころに仲間への応答的働きとなるのである。すなわち、共感とは、新たな感情を生み、行動を喚起するのである。

## 2 共同感情の蘇生

アダム・スミスは、共同感情およびその発現である共感とは自然的なものである、と見ていた。共感的関与は、動物にも見られるのであるが、この点で、共感とは、とっさの反射的な身体状況の共有である。スミスは語る。「われわれは、他人の脚または腕をねらって、一撃が加えられようとするのを見たとき、自然に身をすくめて、われわれの脚または腕をうしろにひっこめる。<sup>6)</sup>」すなわち、「これが、他人の不幸に対するわれわれの共同感情の源泉である。<sup>7)</sup>」であれば、このようなものとしての共感とは、身近で、親密な間柄にある人びと、家族や地域共同体の人びとの間に生起するであろう。

ところが、共同感情が、生き生きと働いているような共同体がいつまでも続いているわけではない。周知のように、スミスが生きた社会では、産業革命が

進行しており、分業生産によって個人が析出され、共同体が変容し始めていたのであった。社会の構成員の流動が起こり、互いに見知らぬ人びとの集団が現れるのである。いわば、郷里も、生活経験も、言葉さえも違った人たちが、雑じり合って暮らし、生産に従事するのである。

この人びとが働く原動力は、自分で自分の幸せをつかもうとする利己心もしくは自己愛（self-love）であった。その意味で、自助の精神といえども、それは個人の利己心に関わっているのであった。このような状況において、スミスは、「共感<sup>8)</sup>は、しかしながら、いかなる意味においても、利己的な原理と見ることはできない。」<sup>8)</sup>という。共同体を脱して都市へ向かい、富を求めて働く人びとは、利己的な原理によっているのである。とはいえ、共感と利己的な原理とは対立するのではない。利己心は「反社会的情感<sup>9)</sup>」ではない。ラスキも指摘していたが、「スミスが描く人間は、富を追求する人間である。」<sup>10)</sup>

スミスは、利己心を経済的動機として働く人間が現れたことを肯定する。もっとも、スミスは、この人間の将来を手放しで楽観していたわけではない。この人間、すなわち個人は新たな共同体を生み出さなければならないのである。それは、共感が可能で、それが行きわたっている社会である。

スミスは語る。「われわれは、他の人びとが何を感じているかについて直接の経験をもたないので、彼らが感動するやり方については観念を形成することはできない。それができるのは、同じような状況でわれわれ自身が何を感じるかを思い浮かべるときだけである。」<sup>11)</sup>「想像力によって、われわれは自分を他人の状況におき、……いわば他人の身体に移入し、あるていど彼と同じ人間になり、彼の感情について何らかの観念を形成し、程度においていくぶん弱いとしても、その人の感情とまったく異なっていない、ある感情を感じさえする。」<sup>12)</sup>「感覚は、われわれ自身を超えさせたことも超えさせることもできない。われわれが、人の感情がどんなものであるかについて何らかの観念をつくりるのは、想像によってだけなのである。」<sup>13)</sup>したがって、「……観察者は、

まず、できるかぎり自己自身を相手の状況において、おそらく受難者に起こりうるあらゆる詳細な苦しみを自らに切実に感じさせるように努力せねばならない。……そして、そのあとは、自己の共感が基礎づけられている状況の想像的な転換をできるだけ完全に行うように、努力しなければならない。<sup>14)</sup>

共同体から個人が析出され、その個人が利己的動機によって経済活動をする場は、お互いに見知らぬ人びとが集まるところである。ここで、共感が生成するとすれば、それは、想像によって自己を他者の身ないし立場におくことである。そして、その想像を可能にする力は自己である。「自己の共感が基礎づけられている状況の想像的転換をできるだけ完全に行うように、努力しなければならない。」とするとき、その努力は自己の意志によるからである。意志は、自己の中核であって、その意味で自己のなかの自己である。この自己が想像的転換を推し進める。

したがって、個人は、利己心を動機として富を追求する存在であったが、それは、同時に自己の想像力によって他者に共感する存在であったのである。このような個人が市民社会を生きて、共同体を構成するのである。

### 3 是認

家族をはじめとして、共同体においては、共感は自然に現れる。そこでは、共感された他者の感情は、そのまま受容される。受容されるとは、是認され、良い、もしくは善いとされることである。親密な共同体においては、感情が濃密に満ちて、相互に共有されており、相手の悲しみや怒りはそのまま感受・共感され、それによって、人は相手の悲しみや怒りの感情をなだめ、和らげようとし、また、相手の喜びには喜びをもって応じ、その喜びを共にするのである。

このような共同体では、共感と是認の感情 (sentiment of approbation) とは分化してはいない。共感も是認も、共同体においては、共同感情の自然かつ本源的な在り様であったのである。スミスは語る。「そこで、自然は、是認さ

りたいという願望だけではなく、是認されるべき（ought to）者でありたいという願望を人間に与えたのであった。<sup>15)</sup>」

それにしても、自然に由来する共感と是認とはどのような関わりにあるのか。スミスの親友であったヒュームは、「共感すなわち感情の交流は、人間のみならず動物のあいだにも生まれる。<sup>16)</sup>」としていたが、スミスがいう自然にも、動物が含まれていると見てよいであろう。

すでに見てきたことであったが、動物行動学の知見によれば<sup>17)</sup>、チンパンジーにも共感があった。ともに喜び、悲しむことが可能であった。それゆえ、悲しむ者を慰め、自分本位な行動や過度の制裁には抗議をすることができた。これは、自然な感情であって、ここでは、共感と是認の感情は一体であった。これは、共同体を濃密に生きる人類においても、同様であったであろう。

だが、すでにみたように、スミスが、「自然は、是認されたいという願望だけではなく、是認されるべきものでありたいという願望を人間に与えた」とするとき、是認に新たな意味が生まれたのである。いずれの是認も願望であるが、「是認されるべきものでありたいという願望」は、是認する者が、いま、ここに在る者とはかぎらず、いつも、いたるところに在る者、いわば、市民社会が共有する一般者を想定しているのである。この一般者は、見知らぬ人への共感が想像的な立場の交換によって可能になったように、想像された是認する他者である。

スミスは、台頭する市民社会のなかで、個人が想像によって見知らぬ者に共感し、是認するのを経験したであろう。想像によって共感が生まれ、是認されるべきものが見えてくるのである。

この想像は個人を結びつける連鎖である。すなわち、「Aが何々をこう思っていると、わたしは思う。」「Aが何々をこう思っているとBが思っていると、わたしは思う。」「Aが何々をこう思っているとBが思っていると、Cが思っていると、わたしは思う。」というように、想像によって、限りなく個人の思い

や感情の連鎖が生まれる。もちろん、Aが思っていることは、他の者が思っていることと同一ではない。それは、ひとつの想像である。思うであれ、感じるであれ、これらは想像による。

この場合、連鎖をつむぐ想像を喚起するものは、自立した個人である。この個人は成熟した自己である。この自己が真っ当な市民社会を形成する。それゆえ、共感も是認も自己を動因としている。

スミスは、是認と共感との関わりについて、次のように語っている。「主たる当事者の原本的情感が、観客の共感的情緒に完全に一致するとき、これらの原本的情感は、この観客にとって必然的に正当かつ適正であり、これらの情感の対象に適合していると見られる。これに反して、観客が、くわしい事情がわかって、それらの情感が、観客が感じていることと一致しないことを発見すると、それらの情感は、観客にとって必然的に不正かつ不適正であり、これらの情感を起こした原因に適していないと見られるのである。それゆえ、他人の情感が、その対象に適合していると認めることは、われわれがそれらの情感に完全に共感すると見ることと同じである。また、情感が対象に適合していると認めないことは、われわれが、それらの情感に完全に共感していないと見ることと同じである。<sup>18)</sup>」

スミスにおいて、他者を是認や否認のほかに、自己是認や否認についても同様なことがいわれる。「われわれが、自分自身の行為を自然に是認したり否認したりするときの原理は、われわれが他の人びとの行為に関して同様な判断を働かせるときと全く同じであるように思われる。われわれが、他人の行為を是認したり否認したりするのは、他人の行為を十分に知って、その行為を支配した感情や動機に完全に共感できるかできないかを感じるときである。同じような方法で、われわれが、われわれ自身の行為を是認あるいは否認したりするのは、他人の立場に自分をおいて、いわば他人の目で、他人の立場から自分の行為を見ると、われわれが、行為に至らしめた感情や動機に完全に移入



かつ共感できるか否かを感じるべきである。<sup>19)</sup>」

スミスによれば、社会において、他者の感情であれ、自己の感情であれ、それに対して、是認できるか否かは、共感できるか否かによる。この場合、社会の他者一般、いわば想像された観客の感情が当事者の感情に共感できるか否かが是認や否認を生む。個人が析出された市民社会では、かつての家族・地域共同体におけるように、直截に共感・是認することはかなわないのであって、一般の観察者を思い浮かべることが不可欠なのであった。それゆえ、スミスは、「観察者の共感あるいは応答的感情を正しさの程度を計る自然かつ原理的な尺度 (sympathy or the correspondent affection of the spectator, the natural and original measure of this proper degree)<sup>20)</sup>」としたのであった。すなわち、共感ないし是認は、現実もしくは想像上の第三者の共感ないし是認によって、適正かつ妥当性 (propriety) をえるのである。

#### 4 第三者

市民社会において、すみやかな共感と是認が成立し難いとすれば、間接的な共感と是認が生成するのは自然のことであった。これら共感と是認が、正しく、適切であるために、それを可能にする基準が生まれるのも自然のことであった。この基準ないし尺度なるものは、他者である観客、すなわち第三者であった。スミスは語っている。「相反する利害について、何らかの正しい比較をなしうするためには、われわれはその立場を変えねばならない。われわれは、それらを、われわれ自身の位置からも相手の位置からも、すなわちわれわれの眼でも相手の眼でも見てはならないのであって、どちらにも特別な関わりがなく、われわれの間にあって公平に判断する第三者の位置から、第三の眼で見なければならぬ。(from the place and with the eye of a third person who has no particular connexion with either, and who judges impartiality between us.)<sup>21)</sup>」

スミスは、「われわれの行為の、現実の、あるいは想像された観客（the real or supposed spectator of our conduct）の感情<sup>22)</sup>」「公平無私な観客<sup>23)</sup>」「想像された公平で事情に通じた観客（the supposed impartial and well-informed spectator）<sup>24)</sup>」「われわれ感情と行為の理念的かつ理想的観察者（the abstract and ideal spectator of our sentiments and conduct）<sup>25)</sup>」「自然が、・・・・・・設立した偉大な規律、現実あるいは想像上の観客の感情を尊重すること<sup>26)</sup>」というが、これらは、いずれも「第三者」の謂いである。

スミスが語る第三者は、感情を有する者で、この感情は公平無私である。したがって、公平無私は、普遍的立法あるいは道德律といった偉大な規律および感情をもった人格的存在によって可能になる。

もっとも、スミスは、非人格的な規律、いわば一般原則（general rule）が市民社会にはあって、それが市民の行動を適正にしていると指摘している。「われわれは、他人の行為をたえず観察しているうちに、何が適切かつ正しく、何が避けられるべきかに関して、知らないうちに自らある一般原則を作りあげるようになる。<sup>27)</sup>」

この「作り上げる」のは、是認と否認の感情である。「われわれは、本来、ある行為を是認したり非難したりする。それは、調べてみると、これらの行為が、ある一般原則に適合しているとか矛盾しているとか見えるからではない。一般原則は、反対に、ある種の、すなわち事情のなかでのあらゆる行為が是認されるか否認されるかということを、経験から発見することによって、形成される。<sup>28)</sup>」「これらの行為の一般原則が、習慣的反省によってわれわれの心のなかに固定されたとき、一般原則は、われわれの特定の状況で、何が行われるのに適切かつ正しいかについて、利己心の虚偽を正すのに非常に役立つのである。<sup>29)</sup>」したがって、「このような行為の一般原則を尊重することは、義務感と正しく称されるもの、人間生活において最大に重要なものの原理、そして人類の大多数が自らの行為を支配することのできる唯一の原理である。<sup>30)</sup>」

ただし、日常の経験のなかで作り上げられた一般原則は、そうであるだけに、普遍妥当なものであるわけではなかった。それゆえ、スミスは、「ほとんどすべての徳の一般原則、すなわち思慮、思いやり、寛容、感恩、友情の任務が何であるかを定める一般原則は、多くの点で、曖昧、不正確であり、多くの例外を認めており、非常に多くの修正を要するので、完全にその原則を顧慮することによって、われわれの行為を規制することは、ほとんど不可能である。<sup>31)</sup>」というのであった。

そうであれば、行為や感情に関して重要なことは、たえず第三者、すなわち公平な観客の共感・是認を顧みることである。スミスにとって、この第三者は、たんに思いやりとか慈愛を有する者とかではなく、「もっと力強い動因<sup>32)</sup>」である。「利己心の、自然に陥りやすい虚偽は、この公平な観客によってのみ正されることができる。<sup>33)</sup>」という。これは、「理性、良心、心の住人、内にある人、われわれの行為の偉大な裁判官、原理<sup>34)</sup>」ともいう。もちろん、ここで述べられている「理性」は、感情に対する理性ではない。これは、現実において、判断する、感情を有した観客を想定しているのである。けだし、スミスは、これを、「自然が、これならびにほかのあらゆる徳を手にいれるために設定した、かの偉大な規律（that great discipline）、すなわちわれわれの行為の現実かつ想像上の観客の感情（the sentiments of the real or supposed spectator）<sup>35)</sup>」とも呼んでいたからである。

さらに、ここで、スミスが、「原理」ということばを用いているとしても、これは、幾何学の公理のようなものではないことは明らかである。「原理」は、「良心」、「心の住人」、「内なる人」、「裁判官」、であり、それゆえ、感情を有した判断者である。すなわち、是認し、否認する者である。これは、「現実の、あるいは想像された観客」ということからいえば、たんなる現実の観客ではない。現実の観客は、外にある人であって、それは、「現実の称賛に対する欲求と非難に対する反感とですべて作られている。<sup>36)</sup>」他方、内にある人は、「称賛

に値すること (praise worthiness) に対する欲求と非難に値することに対する反感とで、すべて作られている。<sup>37)</sup>」したがって、「想像上の観客」「想像された観客」とはいえ、これは、究極的な価値ないし価値の感情、すなわち共感・是認の感情であり、原理とは、このことを意味している。

スミスは、道徳に関する諸学説を批判して、この「観客」の「道徳感情」を明らかにする。「(徳の本姓についての) これらの学説のうち、いずれも、この性格の妥当性あるいは道徳的正しさが確かめられ、判断される、正確かつ明瞭な尺度を与えもしないし、与える素振りさえ見せていない。かの正確かつ明瞭な尺度は、公平で事情をわきまえた観客の共感的感情のほかには、どこにも見出されえないのである。<sup>38)</sup>」

## 5 自製の徳

「観客」、すなわち「第三者」が、規律、原理、良心、心の住人、内なる人、などと称され、しかも、それは、共感や是認の感情を有するものであるとすれば、これは、どのようにして生成するものであるのか。「想像された観客」とはいえ、これは、強制力をもった感情であって、たんなる想像を越えたものである。「現実の観客」は、現にある人びとないしその総体であるが、「想像された観客」は、現に存在せず、心の内に生じるものである。これは、「理念かつ理想的観客」であって、常時、在るものではない。それゆえ、各人は、「理念かつ理想的観客」、すなわち「想像上の公平な観客、胸中の偉大な同居人、行為の偉大な審判者にして裁定者の感情を配慮<sup>39)</sup>」せねばならないのである。(a regard to the sentiments of the supposed impartial spectator , of the great inmate of the breast , the great judge and arbiter of conduct)」

さらに、スミスは語る。「胸中の人、われわれの感情および行為の理念かつ理想的観客は、現実の観客によって眼を覚まされ、自己の責務を思い出させられることを要求することが多い。<sup>40)</sup>」スミスにおいて、「胸中の人」「理念かつ

理想的観客」などと称されるものは、個人の心のなかに在るもう一人の他者である。この他者は、いつ、どこでも働いているわけではない。それゆえ、人は、心のなかにある他者、いわば、もうひとりの感情ある者を揺り起こさねばならない。この他者も、そのことを要求するのである。したがって、わたしと内なる他者とは、相互に関与し、求め合う関係にある。

それにしても、心のなかにある人、良心、理性、原理、などというものは、どのようにして生じるのであるか。これは、「想像された公平な観客」ということからいえば、これはわたしが想像したものであって、それゆえ、わたし自身の投影であるのか。この観客が、感情をもってわたしに是認や否認を迫るものであれば、この観客はわたしの投影を越えている。「想像された」というとき、この観客は想像されることを求める観客である。わたしが想像するというとき、その想像を求めるのは他者である観客であって、わたし自らが起因となって想像するのではない。

それでは、他者は何であるのか。スミスが「現実かつ想像された観客」というとき、これは、心の内の観客でも現実の観客でもない。もちろん、現実の観客とは、地域社会一般の人びとの謂いである。ただ、観客であるからには、これは他者であって、それゆえ、わたしの心の外にあって、それがわたしの心の内に立ち入り、わたしの行為や感情の観客と成ったものという他はない。しかも、この観客は、「理念かつ現実的観客」というからには、現実の観客を越えて、真実、いわば究極ないし普遍的価値に関与している観客である。それゆえ、スミスは、この観客を「良心、理性、原理」、さらに「神的な人 (demigod)<sup>41)</sup>」「われわれの内にある神の代理人たち (vicegerents of God within us)<sup>42)</sup>」とも称したのであった。

もっとも、神なるものが、スミスにどう理解されていたのかは明白ではないが、神ということにおいて、現実の観客を超えた価値に観客が関わっていることは明らかである。

かくして、個人は、現実の観客のみならず心の内にある観客を顧慮しながら生きる。ここでいう顧慮とは、わたしが一方的に関わるということではなく、観客も顧慮を求めているということにおいて、相互的関わり、すなわち対話を可能にする。対話は、個室に独りいるときにも可能である。家族・地域共同体から析出された個人は、このような観客と対話し、その感情、是認と否認を感受する。この意味で、個人は、自己の内面に、自己の行為や感情を見つめる観客をもった者であり、これによって自制することのできる者である。

この観客は、他者でありながら、同時に自己であって、かく見れば、自己は他者であるともいえる。市民社会は、見知らぬ、匿名の人びとのなかにあって、各人がそれぞれ自己に合った生き方をする。その個人が拠りどころにするのは、現実の他者が純化され、理想化された内にある観客である。この観客は、それゆえ、他者であるとともに自己である。個人は、この観客の是認と否認に応えることによって、かつて、人びとが共同体で生きたような共感・是認の世界へ回帰するのである。

スミスは語る。「確固不動の人、自制の偉大な学校、世の中の喧噪と仕事において、徹底して訓育された、賢明にして正しい人<sup>43)</sup>」は、「ひと時でも、公平な観客が彼の感情や行為に下すであろう判断を決して忘れはしない。彼は、ひと時でも、胸中の人をしてその注意をそらさせるようなことは決してしない。この偉大な居住者の眼で、彼は自分自身に関わるもののすべてを見るようにいつも慣らされてきた。この習慣は完全に彼の身についてしまっている。彼は、自分の外的行為や行動のみか、できるかぎり内的感情や情念までも、この畏敬すべき判定者の感情に従って修正ないし修正しようとの努力を不断に続け、また、実際にかかる必然性の下にいるのである。彼は、ただ公平な観客の感情に動かされるだけではない。彼は本当にその感情を取り入れる。彼は、ほとんど自己自身と公平な観客とを同一視して、観客になりきり、かかる行為の偉大な裁決者が、彼に感じるように指令するとおり以外には、ほとんど感じはしない

のである。<sup>44)</sup>」

## むすび

スミスにおいては、公平かつ理想的な観客が、共同体および共同体から析出された個人の解体を防ぎ、新たな共同体と個人を生み出すのであった。もちろん、この観客なるものは、スミスが恣意的に導入したものではなく、共同体の解体、個人の析出の過程で自ずから現れたものであった。このことは、スミスの『道徳感情論』の副題に「道徳感情論すなわち人びとがまず隣人の、そして次に自分自身の行為と性格について自然に判断を下す諸原理の分析・・・・」としたことから明らかである。スミスは、市民社会を生きる人びとをあるがままに見て、それを解釈し、そこから原理を見出し、それが何であるかを示して見せたのであった。

スミスによれば、市民社会を生きる個人は、内に公平な観客を有し、その観客の感情ないし眼を可能な限り気づかい、それに応えながら判断と行為に至っているのであった。それゆえ、この個人は、匿名の集団のなかにあっても、自己の内にある観客を気づかうことによって、濃密な共同体のなかにいる人と同じように、自制（self command）を自然に可能にするのであった。したがって、個人とは、自己の内にある観客の感情に共感し、自制することのできる者の謂いである。

もちろん、この自制は感情であるので、それは、現実の他者の感情に触れることにおいて喚起され、生成する。内にある観客が架空のものでないとするれば、それは当然のことである。かくして、スミスは語る。「子どもが成長して、学校へ通ったり、自分と同じ位の仲間と交わったりするようになると、子どもはすぐに両親が与えてくれたような寛大な偏愛を仲間がもっていないことに気づく。子どもは自然に仲間の気に入ろうとし、彼らから憎まれたり軽蔑されたりするのを避けようとする。自分自身の安全を考えてみることでさえ、子どもに

そうすることを教える。そして、子どもはすぐにじぶんの遊び仲間や友だちが喜ぶように思われるところまで、自分の怒りのみかあらゆる他の情感をも抑える以外には、仲間たちの気に入られ、憎しみや軽蔑から避けることはできない、と気づくのである。子どもは、このようにして、偉大な自製の学校へ入学し、ますます自己に打ち克つことを学び、自己自身の情感に規律を与えるのである。<sup>45)</sup>」

この規律は、「自然が、これならびにほかのあらゆる徳を手に入れるために設立した偉大な規律<sup>46)</sup>」にして、同時に感情を有した観客であって、これは、「われわれが、他人の幸福へ手を出すようなことをしようとするときには、いつでも、われわれの情感の最も横柄なものをも驚かせうような声で、われわれは大勢のなかの一人にすぎず、いかなる点においても他の人びとに比べて優れてはいないこと、また、われわれが恥ずかしくかつ盲目的にも、自分を他人に優先させようとするときには、われわれが報復、嫌悪、呪詛の正しい対象になることを、われわれに向かって叫ぶ者である。<sup>47)</sup>」

このように、スミスは、道徳の本源は感情であり、この感情が市民社会において内在化され、それが個人を形成すると見たのであった。これによって、スミスは、現在の家族・地域および学校教育において、何が問題であるかを開示したのである。

## 注

- 1) Adam. Smith, The Theory of Moral Sentiments, The 8th, London, Printed for A. Strahan; and T.Cadell jun. and W.Davies, in the Strand, 1797. Vol.1, pp.1-2. 1st ed., 1759
- 2) Smith, ibid., p.4.
- 3) Smith, ibid., p.6.
- 4) Smith, ibid., p.102.



- 5) Smith, *ibid.*, p.294.
- 6) Smith, *ibid.*, p.4.
- 7) Smith, *ibid.*, p.61.
- 8) Smith, *ibid.*, Vol.2, p.330.
- 9) Smith, *ibid.*, Vol.1, p.74.
- 10) H.J.Laski, *Political Thought in England*, Oxford University Press, Maruzen Company Limited, 1955, p.191.
- 11) Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, *op. cit.*, Vol.1, p.2.
- 12) Smith, *ibid.*, p.3.
- 13) Smith, *ibid.*, pp.2-3.
- 14) Smith, *ibid.*, p.38.
- 15) Smith, *ibid.*, pp.292-293.
- 16) David Hume, *A Treatise of Human Nature*, Reprinted from the Original Edition, in Three Volumes, Ed by L.A.Selby-Bigge M.A., Oxford at the Clarendon Press. 1928, p.398.
- 17) フランス・ドゥ・ヴァール『利己的なサル、他人を思いやるサル』西田利貞・藤井留美訳 草思社 1998 第2章
- 18) Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, *op.cit.*, Vol.1, p.23.
- 19) Smith, *ibid.*, p.276.
- 20) Smith, *ibid.*, Vol.2, pp.380.
- 21) Smith, *ibid.*, Vol.1, pp.333.
- 22) Smith, *ibid.*, p.355.
- 23) Smith, *ibid.*, p.337.
- 24) Smith, *ibid.*, p.321.
- 25) Smith, *ibid.*, p.380.
- 26) Smith, *ibid.*, p.355.
- 27) Smith, *ibid.*, p.393.
- 28) Smith, *ibid.*, p.395.
- 29) Smith, *ibid.*, p.398.

- 30) Smith, *ibid*, p.402.
- 31) Smith, *ibid*, p.437.
- 32) Smith, *ibid*, p.336.
- 33) Smith, *ibid*, p.337.
- 34) Smith, *ibid*, p.336.
- 35) Smith, *ibid*, p.355.
- 36) Smith, *ibid*, p.322.
- 37) Smith, *ibid*, p.322.
- 38) Smith, *ibid*, Vol.2, p.265.
- 39) Smith, *ibid*, p.188.
- 40) Smith, *ibid*, Vol.1, p.380.
- 41) Smith, *ibid*, Vol.2, p.140.
- 42) Smith, *ibid*, Vol.1, p.143.
- 43) Smith, *ibid*, p.359.
- 44) Smith, *ibid*, pp.360-361.
- 45) Smith, *ibid*, p.356.
- 46) Smith, *ibid*, p.355.
- 47) Smith, *ibid*, p.337.